

古代・中世・近世の日向における火打石の変遷とその特質

藤木 聰
(宮崎県埋蔵文化財センター)

1 目的と検討方法

火打石と火打金は、人の暮らしに不可欠な火を得るための道具の1つとして、古代から近世までの長きにわたり採用されてきたものである。日向⁽¹⁾におけるこれらを対象とした考古学的状況としては、火打金の型式変遷が概観されるとともに、15年前にはわずか数点しか知られていなかった遺跡出土火打石も2021年度末までで345点にまで増加している(藤木2017,2022)。しかし、個々の資料報告は積み上がっているものの、日向における遺跡出土火打石の変遷や特質についての総体・全体像が見えづらい現状があり、本稿は、その解消を目指すものである。

作業手順として、便宜上、日向を8つの小地域(西臼杵・東臼杵・日向入郷・児湯・宮崎・西諸県・北諸県・南那珂)に分け、出土遺跡と火打石やその石材を網羅しつつ、時代のわかる遺構出土あるいはそれに準じた出土状況を持つ火打石を抽出し、遺跡出土火打石の時間的指標・定点とする。火打石の時代決定にあたり遺構等での共伴遺物に頼らざるをえないのは、火打石とは、この形に仕上げようといった意図的な製作によるものではなく、あくまで火打金と打ちつけて使用・消耗されつけた結果としての、使用過程でいかにも形状変化した姿にすぎないからである。たとえば平安時代と江戸時代の火打石を並べても、この形だからこの時代のものと区別することは難しく、ひとまずの作業手順として出土遺構等の時代を援用することとなる。遺構出土品でないものや採集資料であっても、遺跡の全体相から火打石の年代を推測しうる事例等があれば注目していく。

また、火打石に用いられた石材は、その使用者が火打石を入手するにあたって、近隣の山河から個人で採取したのか商品として購入したのかといった、当時の社会・経済のあり方がその選択に影響を与えるものと考えられる。たとえば、阿波の大田井産チャートが18世紀以降の九州において火打石として広く流通すると把握されているように(藤木2012)、時代や地域によって石材選択に変化があって石材が時代を示す有効な指標の1つになる場合があり、今回も石材に注目していく。なお、石材名は、全点について実見により決定したため、報告書記載から変更となったものがある。

このほか、火打石にかかる用語として、素材(原石)獲得から粗割り等されたまで火打金と打ち付ける前の段階を「未使用の火打石」、使用段階にあるものを「火打石」、使用によって生じた欠片や鋭い稜線を再生するために打ち割られそのまま廃棄となったものを「火打石の欠片」と呼び分ける(図1)。

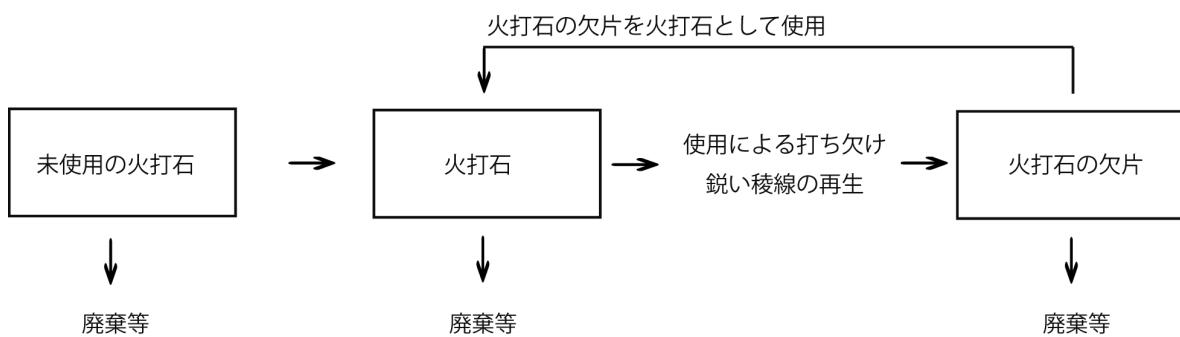


図1 ライフサイクルからみた火打石の分類

2 小地域ごとの火打石の変遷

(1) 西臼杵 (高千穂・日之影・五ヶ瀬町域)

火打石は、高千穂町域では城ノ平遺跡（県教委 1993・文①）⁽²⁾・薄糸平遺跡（高千穂町教委 1978・藤木 2014）、日之影町域では平底第2遺跡（県埋セ 2019、火打石は本稿初出）・出羽洞穴（鈴木 1967 ほか、火打石は本稿初出）、五ヶ瀬町域では樋口遺跡（県埋セ 2024a、一部の火打石は本稿初出）から出土あるいは採集されている。いずれの事例も、出土状況のみでは時代特定が難しい。石材は、城ノ平遺跡のものが粗質の石英製で、それ以外はチャート製で占められる。チャートは五ヶ瀬川流域の先史遺跡でも多用される石材であり、五ヶ瀬川ほか近隣で採取されたものと推定される。色に注目すると、灰白色・乳白色系チャートが多く、樋口遺跡でのみ濃緑色系のものがみられる。

(2) 東臼杵 (延岡市域)

中世では、海舞寺遺跡（県埋セ 2010b）で13世紀の遺物を含む120号遺構出土の水晶製火打石がある。また、遺跡の全体相から中世に収まるであろうものには、山田遺跡（県埋セ 2007b）の2号ならびに3号不明遺構・1号掘立柱建物西側のピット・表土出土のチャート製火打石がある。家田城跡（県埋セ 2011d）の曲輪3表土出土のチャート製火打石は、まずは城跡に伴う可能性を考えてもよいが、同じく表土から出土した西南戦争当時の弾丸等に伴う可能性も残ってしまう。

近世以降では、延岡城内遺跡⁽³⁾のうち、西ノ丸跡にあたる第44次調査（延岡市教委 2019）において、遺物や炭素年代から17世紀前半とされる3号土坑出土のチャート製火打石、県埋セ調査地点（県埋セ 2012c）の19世紀とされる1号溝状遺構出土のチャート製火打石ならびに近世とされる落ち込みから大田井産チャート製火打石が出土している。このほか、延岡城内遺跡の県埋セ調査地点出土のチャート・石英製火打石、延岡城下町遺跡第7次調査（延岡市教委 2017）出土のチャート製火打石は、遺跡の全体相から近世のものであろう。森ノ上遺跡（県埋セ 2011c）出土のチャート製火打石は、伴出遺物から近世後半と考えられる。

このほか、出土状況のみでは時代特定が困難なものとして、天下城山遺跡（県埋セ 2006c）曲輪出土チャート製火打石、矢野原遺跡（県教委 1995b）攪乱出土チャート製火打石、吉野第2遺跡（県埋セ 2007e）試掘トレンチ出土チャート製火打石、カラ石の元遺跡（県埋セ 2010b）調査区内採集の石英製火打石、鳴川引地（県埋セ 2010b）表採のチャート・大田井産チャート・石英製火打石、野地久保畠遺跡（県埋セ 2011c）・海舞寺遺跡（県埋セ 2010b）出土ならびに延岡市吉野（藤木 2014）採集の大田井産チャート製火打石がある。

(3) 日向入郷 (日向市・美郷町・椎葉村・諸塚村域)

中世では、塩見城跡（県埋セ 2012a）曲輪Gで16世紀後半の15号柱穴から石英製火打石、水の手曲輪で17世紀初頭までに収まる117号柱穴からチャート製火打石、16世紀中～後半以降とされる堀A3でチャート製火打石が出土している。このほか、曲輪A3からチャート製火打石2点、曲輪A4から石英製火打石、曲輪Eから石英製火打石・チャート製火打石の欠片、曲輪Gからチャート製火打石、曲輪G2から大田井産チャート製火打石の欠片、曲輪H1からチャート製火打石、曲輪Jから大田井産チャート製火打石、曲輪Kから石英製火打石、曲輪Jからチャート製火打石が出土した。これら遺構外出土の火打石は、陶磁器や煙管のほか近世以降の遺物も各曲輪から出土していることから、山城の主年代のものから廃城後に持ち込まれた火打石までが含まれると推定でき、その全てを中世段階に限定することは難しい。

近世では、岡遺跡第9次調査（県埋セ 2013f）で18世紀後半以降とされる1号溝状遺構出土のチャート製火打石がある。このほか、出土状況のみでは時代特定が困難なものとして、板平遺跡第

- これまでに知られている火打石出土遺跡
- 本稿付編で火打石が新たに資料化された遺跡
- △ 【参考】民俗資料としての火打石が収集された地点

※ 地図中の 1 ~ 107・A ~ D は右下の遺跡名一覧と対応する

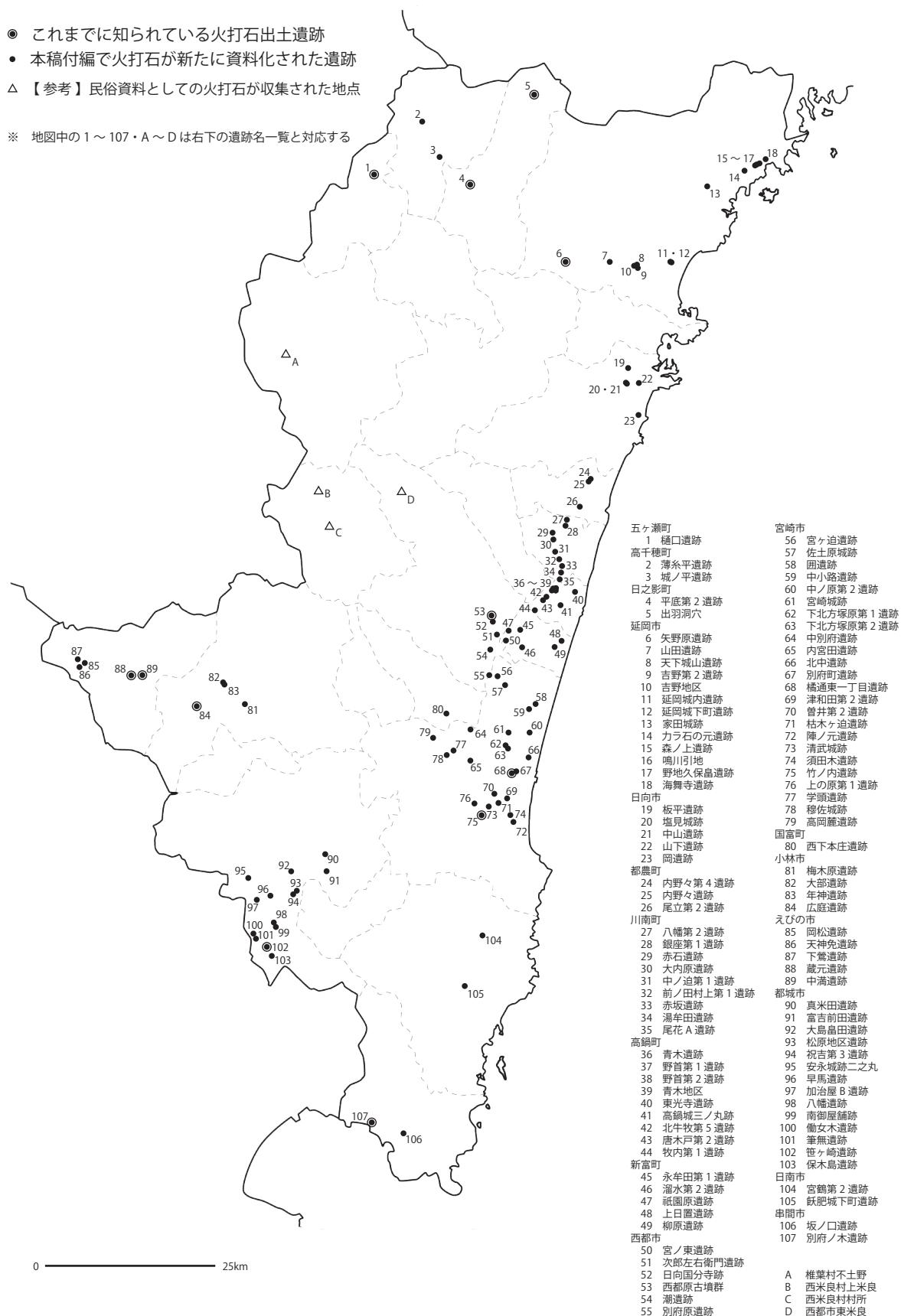


図2 火打石の出土した宮崎県域の遺跡分布図 ver.2024

1次調査（県埋セ 2008f）出土の石英・チャート・大田井産チャート製火打石、岡遺跡第9次調査（県埋セ 2013f）の近代における造成土出土のチャート製火打石7点、中山遺跡（県埋セ 2004・文①）出土のチャート製火打石、板平遺跡第3次調査（県埋セ 2011e）・山下遺跡（日向市教委 2020）・岡遺跡第6次ならびに第7次調査（県埋セ 2012b）出土の大田井産チャート製火打石がある⁽⁴⁾。

（4）児湯（西都市・児湯郡域）

児湯では、火打石の出土遺跡や点数が多いため、現在の町村域ごとでみていく⁽⁵⁾。

ア.都農町域

内野々遺跡（県埋セ 2011f）出土のチャート製火打石、内野々第4遺跡（県埋セ 2011f）表土等出土の玉髓・チャート製火打石、尾立第2遺跡（県埋セ 2008b）の旧石器時代包含層であるV層出土のチャート製火打石があり、いずれも出土状況のみでは時代特定が難しい。尾立第2遺跡のものは、旧石器時代包含層という極めて異例な出土位置となるが、報告書中でも述べられているとおり、そのまま旧石器時代のものと捉えるのではなく、後世の火打石が偶発的に下位層に混入した可能性を想定すべきものである。

イ.川南町域

中世では、大内原遺跡（県埋セ 2006b）で包含層出土のチャート製火打石ならびに火打石の欠片・石英製火打石があり、他出土遺物との関係から13世紀前半（上床 2015）でよからう。近世以降では、湯牟田遺跡第1次調査（県埋セ 2005b・文①）表土出土の玉髓製火打石は、他遺構・遺物の様相から近代以降の可能性がある。

銀座第1遺跡（県埋セ 2006a）の例は、遺構配置等から中世に開削されたとわかる溝状遺構であっても、その埋土から中世～近世遺物が混在して出土する点が報告されている。したがって、中世とされる5号溝状遺構（第1次調査）出土の玉髓・チャート製火打石、44号溝状遺構（第4次調査）出土の玉髓・石英に近い石質の硬砂岩・チャート製火打石ならびにチャート製火打石の欠片について、近世以降の火打石が意図せず混入している可能性を踏まえておくべきで、これらについて年代定点の上では参考資料にとどめておきたい。銀座第1遺跡では、上記以外の遺構出土例として、中世に開削され近世遺物を埋土中に含む1号溝状遺構（第1次調査）出土の石英ならびにチャート製火打石・チャート製未使用の火打石、近世後半の陶磁器を伴う66号土坑（第2次調査）出土の玉髓・チャート製火打石、中世から現代に至るとされた1号道路状遺構（第2次調査）出土のチャート製火打石、同遺構に先行すると解釈された2号道路状遺構出土の玉髓・石英製火打石がある。

このほか、出土状況のみでは時代特定が難しいものとして、八幡第2遺跡（県埋セ 2007c・文①）確認調査トレンチ出土のチャート製火打石、銀座第1遺跡のうち第1次調査（県埋セ 2006a）包含層等出土の石英（水晶質のものも含む）・チャート製火打石、第2次調査（県埋セ 2006a）包含層出土の石英製火打石、第3次調査（県埋セ 2006a）⁽⁶⁾の中世以降の1号溝状遺構出土の玉髓製火打石の欠片（本稿初出）、中世以降の3号溝状遺構出土のチャート製火打石、表土出土のチャート製火打石（1点は本稿初出）・玉髓製火打石の欠片（本稿初出）、第4次調査（県埋セ 2006a）18号掘立柱建物出土のチャート製火打石、第5次調査（県埋セ 2011）表土出土のチャート製火打石、中ノ迫第1遺跡第1次調査（県埋セ 2007a）表土出土のチャート製火打石、前ノ田村上第1遺跡（県埋セ 2005d）包含層ほか出土のチャート・石英・玉髓製火打石19点、赤坂遺跡（県埋セ 2007d）包含層出土のチャート製火打石、湯牟田遺跡第2次調査（県埋セ 2005b）の弥生後期後葉～終末の11号堅穴住居埋土出土の石英製火打石ならびに包含層出土のチャート製火打石・確認調査トレンチ出土の石英製火打石、尾花A遺跡（県埋セ 2011b）包含層ほか出土のチャート・石英・

古代・中世・近世の日向における火打石の変遷とその特質（藤木 聰）



図3 日向における火打石の石材カタログ

※藤木 2022・本稿図4、図5所収のものは掲載していない

玉髓製火打石 7 点、赤石遺跡（県埋セ 2009a・文①）包含層出土の玉髓製火打石の欠片がある。

なお、湯牟田遺跡第 2 次調査 11 号竪穴住居出土の火打石は、全国的な火打石研究の現状からも弥生後期後葉～終末という遺構年代のものとは想定しづらく、同遺跡で多く検出されている中世遺構等に伴う火打石が何らかの理由で混入したものと捉えておきたい。

ウ. 高鍋町域

中世では、高鍋城三ノ丸跡（県埋セ 2009b）で 14～15 世紀の 1 号溝状遺構出土の乳白色チャート製火打石がある。近世以降では、野首第 1 遺跡（県埋セ 2007g）で 18 世紀後半から 19 世紀の 14 号土坑出土の大田井産チャート製火打石、同時期の 61 号土坑出土のチャート製火打石がある。野首第 1 遺跡では、上記のほか、包含層等から玉髓・石英・大田井産チャート・チャート製火打石や玉髓・大田井産チャート製火打石の欠片が出土しており、遺跡の全体相からおおよそ近世以降のものであろう。

このほか、出土状況のみでは時代特定が難しいものとして、東光寺遺跡（県埋セ 2011c・文①）包含層出土の石英・チャート製火打石、唐木戸第 2 遺跡（県埋セ 2005a・文①）ならびに青木遺跡（県埋セ 2019b・文①）出土の玉髓製火打石、野首第 2 遺跡（県埋セ 2008c）表土・攪乱等出土のチャート・石英・玉髓製火打石 17 点、牧内第 1 遺跡（県埋セ 2007h）包含層出土の玉髓製火打石の欠片、北牛牧第 5 遺跡（県埋セ 2003c・文①）出土の玉髓製火打石・火打石の欠片がある⁽⁷⁾。西都原考古博物館所蔵の井上サワ子氏寄贈資料には青木地区採集の玉髓製火打石・火打石の欠片、大田井産チャート製火打石が含まれ（藤木 2014）、その石材構成は、青木地区一帯に位置する青木遺跡・野首第 1 遺跡・野首第 2 遺跡のそれとよく一致する。

エ. 新富町域

いずれも表土や包含層からの出土あるいは採集品である。永牟田第 1 遺跡（県埋セ 2005c）包含層出土の玉髓製火打石、柳原遺跡（県教委 1994・文①）出土の半透明オレンジ色のメノウ・チャート製火打石、祇園原遺跡（県埋セ 2003b・文①）出土の玉髓製火打石がある。柳原遺跡の半透明オレンジ色のメノウは玉髓と親和的なものであるが、いずれにしても近隣で採集可能な石材ではない。このほか、新富町教育委員会による分布調査により、溜水第 2 遺跡（文①）で大田井産の可能性があるチャート製火打石、上日置遺跡（文①）で玉髓製火打石、地点不明のもので大田井産チャート製火打石が採集された。

オ. 西都市域

複数の遺跡から火打石の出土があり、特に宮ノ東遺跡（県埋セ 2008d）では、発掘調査の段階から意識的に火打石の回収に注意が払われた結果、古代から近代までの火打石 29 点・未使用の火打石 9 点・火打石の欠片 1 点の計 39 点が出土している。

古代では、宮ノ東遺跡（県埋セ 2008d）の 8 世紀後半～9 世紀初頭の 8305 号竪穴住居出土のチャート製火打石、9 世紀前半の 458 号竪穴住居出土のチャート製火打石、8～9 世紀の 1054 号土坑出土の石英製火打石がある。

中世では、宮ノ東遺跡（県埋セ 2008d）の 12 世紀末～13 世紀初頭の 3219 号道路状遺構 C 中層ならびに 12・16 世紀の遺物を多く含む 4894 号溝状遺構出土のチャート製未使用の火打石、15～16 世紀の 3208 号溝状遺構 B 下層出土のチャート製火打石、次郎左右衛門遺跡（県埋セ 2010c）の古代～14 世紀前半の遺物を含む 5 号溝状遺構出土のチャート製火打石がある。

近世以降では、宮ノ東遺跡（県埋セ 2008d）の 17 世紀以降の 4966 号溝状遺構ならびに 17 世紀後半以降の 3205 号溝状遺構 C 出土のチャート製未使用の火打石、18 世紀後葉以降（堀田

2022) の 3222 号集石墓出土の石英製火打石、18 世紀後半以降の 3206 号溝状遺構 A 出土の石英製火打石、18 世紀後半以降の 4991 号溝状遺構 D7 出土のチャート製未使用の火打石、近現代の 2166 号溝状遺構出土のチャート製火打石ならびに未使用の火打石・石英製火打石、近現代の造成面 (S3102) 出土の石英製火打石、次郎左右衛門遺跡（県埋セ 2010c）の 18 世紀後半～19 世紀の 1 号溝状遺構上層出土のチャート製火打石がある。別府原遺跡（県埋セ 2002b・文①）墳乱出土の玉髓製火打石は、遺跡の全体相から近世以降を中心とした年代の中で理解してよからう。

このほか、出土状況のみでは時代特定が難しいものとして、宮ノ東遺跡（県埋セ 2008d）包含層ほか出土のチャート・大田井産チャート・石英・水晶・玉髓製火打石そして石英・水晶製未使用の火打石、玉髓製火打石の欠片、次郎左右衛門遺跡（県埋セ 2010c）包含層出土のチャート製火打石、潮遺跡（県埋セ 2017）包含層⁽⁸⁾出土のチャート製火打石、日向国分寺跡（県教委 1991・文①）の宮崎県教育委員会による 1989 年度試掘調査 5 トレンチ出土の石英・チャート製火打石がある。西都原古墳群でも、173 号墳（県教委 2007）・201 号墳（県教委 2019a）・265 号墳（県教委 2019b）・291 号墳（県教委 2024）の表土等から石英・チャート製火打石が出土している（201・265 号墳の火打石は本稿初出）。

(5) 宮崎（宮崎市域）

古代では、下北方塚原第 2 遺跡（宮崎市教委 2011・文①）で掘立柱建物との切り合い関係により 9 世紀後半までに収まる 1 号溝下層出土のチャート製火打石、囲遺跡（宮崎市教委 2019）の 10 世紀中葉～後葉（堀田 2012 でいう IV 期）の坏を伴う 8 号溝状遺構出土のチャート製火打石がある。また、下北方塚原第 1 遺跡（宮崎市教委 2010・文①）の 13 号小穴出土のチャート製火打石、囲遺跡（宮崎市教委 2019）の 9 号不明遺構ならびに 127・410・487 号小穴出土のチャート製火打石は、遺跡全体の年代観から古代～中世に収まる可能性がある。

中世では、中小路遺跡（宮崎市教委 2019）で 15 世紀中頃～16 世紀の遺物を伴う 14 号不明遺構出土のチャート製火打石がある。橘通東一丁目遺跡（県埋セ 2018、火打石は本稿初出）包含層出土のチャート製火打石は、付編で検討したとおり、中世までに収まるものである。別府町遺跡（県埋セ 2006d）32 号小穴出土の石英製火打石は中世のものとされる。また、穆佐城跡（宮崎市教委 2013）曲輪 7 ならびに曲輪 8 表土出土のチャート・鉄石英製火打石、宮崎城跡（宮崎市教委 2020b）曲輪Ⅲ（野首城）表採のチャート製火打石、清武城跡（県教委 1979・藤木 2014）出土の石英・玉髓製火打石は、各山城の主年代に収まる可能性が第一に想定される一方で、遺構出土でない点からは、先述の塩見城跡と同じく、廃城後の諸活動によって近世以降に持ち込まれた火打石である可能性も踏まえておきたい。

近世以降になると多くの事例がある。津和田第 2 遺跡（宮崎市教委 2021a）7 号土坑墓出土の玉髓製火打石は、19 世紀代の煙管・火打金等とセットで副葬されたものである。佐土原城跡のうち第 8 次調査（宮崎市教委 2015）では、18 世紀後半～19 世紀の 38 号土坑出土玉髓製火打石、第 6 次調査（宮崎市教委 2016、一部の火打石は本稿初出）では 18 世紀～19 世紀前半の 34 号土坑出土の石英製火打石、18 世紀中頃（遺構年代は堀田 2022 参照）の 54 号土坑出土の玉髓製火打石、17～19 世紀に収まる 6 号溝状遺構出土の珪質岩・玉髓製火打石がある。また、佐土原城跡第 6 次調査の 88 号土坑出土の玉髓製火打石、1527 号小穴出土のチャート製火打石は、遺跡の全体相からみて近世以降のものでよからう。高岡麓遺跡では、5 地点・22 地点・28 地点・32 地点から計 5 点の火打石が出土している。5 地点（県教委 1996・文①）の 10 号土坑出土の珪質岩製火打石は、共伴遺物から 18 世紀後半～19 世紀代のものと考えられる。他地点（宮崎市

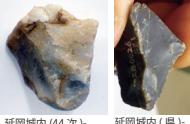
	西臼杵	東臼杵	日向入郷	児湯
古代				 <p>①宮ノ東 - 穴住居 8305(8C 後～9C 初): チャート ②宮ノ東 - 穴住居 458(9C 前): チャート ③宮ノ東 - 士坑 1054(8～9C): 石英</p>
中世	 <p>海賊寺 - 遺構 120(13C): 水晶</p>	 <p>①延岡城跡曲輪 G - 柱穴 15(16C 後): 石英 ②延岡城跡水の手曲輪 - 柱穴 117(～17C 初) チャート ③延岡城跡 - 堀 A3(16C 後～): チャート ※他は石英・大田井チャート</p>	 <p>内原 - 包含層 (13C 前): チャート・石英 次郎左右衛門 - 溝 5(13C～14C 前): チャート</p>	 <p>高鍋城三ノ丸跡 - 溝 1(14～15C): チャート 宮ノ東 - 溝 3208 下 (15～16C): チャート</p>
近世以降	 <p>延岡城内 (44 次) - 士坑 3(～17C 前): チャート 延岡城内 (県) - 溝 1(19C): チャート</p>	 <p>①興 (9 次) - 溝 1(18C 後～): チャート ※他はチャート</p>	 <p>次郎左右衛門 - 溝 1(18C 後～19C): チャート 宮ノ東 - 墓 3222(18C 後～): 石英 宮ノ東 - 造成 3102(近現代): 石英 宮ノ東 - 溝 3206(18C 後～): 石英</p>	 <p>①野首第 1 - 士坑 14(18C 後～19C): 大田井チャート ②野首第 1 - 士坑 61(18C 後～19C): チャート ※上段: 玉髓、中段: 玉髓(左4点)・石英(右1点)、下段: 大田井チャート(左4点)・チャート(右4点) 宮ノ東 - 溝 216(近現代): チャート・石英 ※ No Image</p>

図4 日向における火打石の変遷 (1)

教委 2012・文①) のものは撹乱や時期不明の遺構出土となり、32 地点撹乱出土のチャート製火打石、22 地点 7 号土坑出土のチャート・粗質メノウ製火打石・22 地点 5 号撹乱出土の玉髓製火打石、28 地点撹乱出土のチャート製火打石⁽⁹⁾ がって、遺跡の全体相からいざれも近世以降のものでよからう。上の原第 1 遺跡（県埋セ 2000a・文①）で近世とされた 2 号溝ならびに近世末以降とされた 4 号溝出土の玉髓製火打石、中別府遺跡（県埋セ 2001・文①）の近世以降という耕作土出土の大田井産チャート製火打石がある。付編で挙げた新資料である竹ノ内遺跡のチャート製火打石は、近世とされた 11 号土坑出土の可能性がある。

このほか、出土状況のみでは時代特定が難しいものには、下北方塚原第 1 遺跡（宮崎市教委 2010・文①）撹乱出土の石英製火打石、宮ヶ迫遺跡（宮崎市教委 2014）2 区撹乱出土のメノウ製火打石、囲遺跡（県埋セ 2007i）表採のチャート・石英・玉髓製火打石、中ノ原第 2 遺跡（宮崎市教委 2021b）表土出土の石英製火打石、内宮田遺跡（県埋セ 2001・文①）出土のメノウ製火打石、学頭遺跡（県教委 1995a・文①）28 号柱穴出土の大田井産チャート製火打石ならびに包含層出土のチャート製火打石、須田木遺跡（清武町教委 2004・文①）出土の玉髓・石英製火

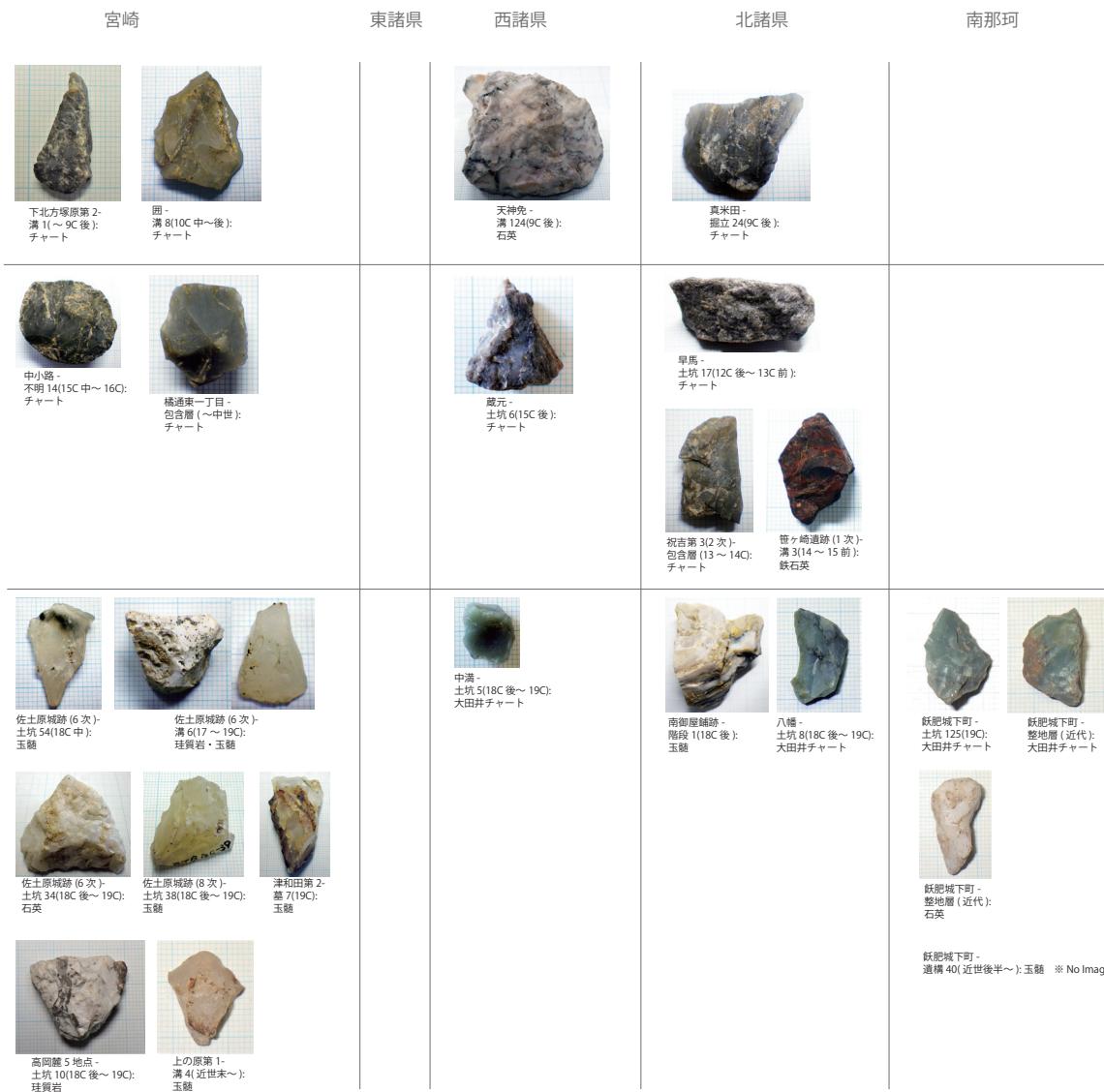


図5 日向における火打石の変遷（2）

打石、竹ノ内遺跡（県埋セ 2000b・文①）出土のチャート・玉髓製火打石、枯木ヶ迫遺跡（県教委 2002a）・曾井第2遺跡（県埋セ 2008e）・陣ノ元遺跡（県埋セ 2024b）出土の玉髓製火打石がある。

なお、県埋セ調査の宮ヶ迫遺跡（県埋セ 2013g）では、細かな出土状況の記載等はないものの古墳時代の2号溝状遺構からチャート製火打石が出土したと報告されている。これについて、湯牟田遺跡第1次調査等の場合と同じく、後世の火打石が混入したと解釈する方が妥当であろう。宮ヶ迫遺跡の同調査では、包含層からもチャート製火打石が出土している。

(6) 東諸県（国富・綾町域）

西下本庄遺跡（県埋セ 1999・文①）の包含層出土のチャート製火打石がある。火打石とのセット関係等は不明であるが、同遺跡からは、現状で日向最古となる12世紀中葉から末の火打金（藤木 2017）が土坑から出土している。

(7) 西諸県（小林・えびの市域ほか）

えびの市域では、古代から近世以降の火打石が出土している⁽¹⁰⁾。古代では、天神免遺跡（えびの市教委 2010）で9世紀後半の124号溝出土の石英製火打石がある。中世では、蔵元遺跡（え

びの市教委 1996、火打石は本稿初出）で 15 世紀後半の 6 号土坑出土のチャート製火打石がある。蔵元遺跡では、上記以外にも石英・チャート製火打石が出土しており、遺跡全体の年代観から中世に収まるものとみてよかろう。

近世以降では、中満遺跡（えびの市教委 1996、火打石は本稿初出）で 18 世紀末～19 世紀代の 5 号土坑出土の大田井産チャート製火打石がある。このほか、やや年代幅をもつものとして、天神免遺跡の中世末以降とされる 2 号不明遺構出土の石英製火打石ならびに中世～近代とされる 3 号道路状遺構出土のチャート製火打石、近代以降とされる 147 号溝出土の鉄石英製火打石、岡松遺跡（えびの市教委 2010）の近世以降とされる 1 号溝出土のチャート製火打石、下鷺遺跡（えびの市教委 2011）V 区で近代以降とされる 1 号溝出土の石英製火打石がある。

小林市域では、中世以降の火打石が表土や包含層等から出土している。遺跡の全体相や共伴遺物の年代から、年神遺跡（小林市教委 2001・文①）ならびに大部遺跡（小林市教委 2001・文①）出土のチャート製火打石は中世、梅木原遺跡（小林市教委 2000・文①）出土の玉髓製火打石は近世以降、広庭遺跡（小林市教委 2003・文①）のうち 1 区出土のチャート製火打石は近世、同 4 区出土の玉髓（本稿付編）・サーモンピンク色の珪質岩製火打石は 18 世紀中頃～19 世紀のものと推定される。

（8）北諸県（都城市域ほか）

都城市域では、えびの市域と同じく、古代から近世以降にわたる火打石が出土している。古代では、真米田遺跡（都城市教委 2014）で 9 世紀第 3 四半期とされる 24 号掘立柱建物出土のチャート製火打石がある。同遺跡の 440 号ピットならびに包含層出土のチャート製火打石も、遺跡全体の年代観からひとまず 9～10 世紀の所産としてよかろう。

中世では、笛ヶ崎遺跡第一次調査（県埋セ 2016・火打石は本稿初出）B 区で 14～15 世紀前半の 3 号溝状遺構出土の鉄石英製火打石がある。また、遺跡の全体相から、早馬遺跡（都城市教委 2008a）17 号土坑ならびに包含層出土のチャート製火打石が 12 世紀後半～13 世紀前半、祝吉第 3 遺跡第 2 次調査（都城市教委 2015）包含層出土のチャート製火打石が 13～14 世紀となる可能性がある。このほか、加治屋 B 遺跡（都城市教委 2008b）包含層出土の石英製火打石、松原地区遺跡第 7 次調査（都城市教委 2018）出土の赤チャート製火打石、安永城跡二之丸（都城市教委 2019）5 トレンチ溝状遺構 a 層ならびに 2 号掘立柱建物跡出土のチャート製火打石、富吉前田遺跡（県埋セ 2011i）包含層出土の石英製火打石がある。

近世以降では、南御屋鋪跡（都城市教委 2017）で 18 世紀後半の 1 号階段状遺構出土の玉髓製火打石、八幡遺跡（県埋セ 2003a・文①）で 18 世紀後半～19 世紀の 8 号土坑出土の大田井産チャート製火打石の欠片がある。八幡遺跡の南北トレンチ出土のメノウ製火打石も遺跡の全体相から近世のものとみてよい。また、大島畠田遺跡（県埋セ 2008g）の包含層出土のチャート製火打石は、出土地点付近に広がる近世以降の墓群に伴う可能性がある⁽¹¹⁾。

このほか、出土状況のみでは時代特定の難しいものとして、保木島遺跡（県埋セ 2021）搅乱出土の赤チャート製火打石、筆無遺跡（県埋セ 2008a）表土出土の玉髓製火打石⁽¹²⁾、笛ヶ崎遺跡第一次調査（県埋セ 2016・火打石は本稿初出）B 区出土のチャート製火打石、働く木遺跡（県埋セ 2011g）出土の玉髓製火打石がある。

（9）南那珂（日南・串間市域）

日南市域では、近世の飫肥城下町遺跡（県埋セ 2012d・文①）で大田井産チャート・玉髓製火打石・火打石の欠片、チャート・石英製火打石が出土している。このうち、大田井産チャート製火打石のい

くつかは19世紀前半を中心とする125号廃棄土坑ならびに近代の整地土出土、玉髓製火打石の欠片は近世後半以降の40号遺構出土、石英製火打石は近代の包含層出土である。

日南市域の宮鶴第2遺跡（県埋セ2010a）出土の玉髓製火打石、串間市域の坂ノ口遺跡（県埋セ2012e）出土のチャート製火打石、同市域の別府ノ木遺跡（県埋セ2014・火打石は本稿初出）出土のチャート製火打石は、遺跡の全体相から近世以降のものと考えられる。

3 日向における火打石の変遷とその特質

ここまで概観してきた日向における小地域ごとの遺跡出土火打石について、以下では、その変遷や特質の総体把握を試みたい。

まず、宮ノ東遺跡（児湯）の8世紀後半～9世紀前半の竪穴住居や近い年代の土坑出土のチャート・石英製火打石、下北方塚原第2遺跡（宮崎）の9世紀後半までに収まる溝出土のチャート製火打石、囲遺跡（宮崎）の10世紀中葉～後葉の溝出土のチャート製火打石、天神免遺跡（西諸県）の9世紀後半の溝出土の石英製火打石、真米田遺跡（北諸県）の9世紀第3四半期の掘立柱建物出土のチャート製火打石が示すとおり、火打石・火打金という新来の発火具セットやその発火法の始まりは、特定の範囲のみ（たとえば日向国府周辺）で採用されたのではなく、児湯・宮崎・西諸県・北諸県に点在していることから、遅くとも8～9世紀の日向の全体に広がっていた可能性を読み取り可能である（図4・5）。これらの火打石とセットとなる古代に遡る火打金は、日向において現時点では未見であるものの、将来的に発見されるものと期待される。列島規模に視点を広げると、日向の事例と近い年代の火打石・火打金が九州一円をはじめ各地で散見されており、より議論を深化させる上で、火打石等の有無のみでなく、火打石・火打金を用いた発火法の普及度合いやその導入契機の把握等が課題となってこよう。また、火打石入手の観点から火打石石材を観察すると、各遺跡近隣でそれぞれ採取したと推定されるチャート・石英が用いられたようであり、日向の古代においては特定産地の火打石が流通するのではなく、いわゆる地産地消型であったと推定される。

なお、古代より遡る年代の遺構等から火打石が出土したものとして、旧石器時代包含層出土の尾立第2遺跡、弥生後期後葉～終末の竪穴住居埋土出土の湯牟田遺跡第2次調査、古墳時代の溝状遺構出土の宮ヶ迫遺跡があり、本稿では、全国各地ならびに日向における概況からみて後世の火打石が偶発的に混入した可能性を想定した。これは消去法的な見解に過ぎず、その出土した遺構や包含層に伴うことを完全否定はできないものもある。今後、上記のような古い年代の可能性を持つ出土状況に接した際は、発掘調査時点で確実にその時期のものと証し立てる十分な検証と記録が必須である。

次に、中世になると火打石の出土例も増加する。年代の定点となるものとして（図4・5）、12～14世紀では、海舞寺遺跡・大内原遺跡・宮ノ東遺跡・次郎左右衛門遺跡における水晶・石英・チャート火打石、15～16世紀では、塩見城跡・高鍋城三ノ丸跡・宮ノ東遺跡・中小路遺跡・蔵元遺跡・笛ヶ崎遺跡第一次調査・早馬遺跡・祝吉第3遺跡第2次調査における石英・チャート・鉄石英製火打石が挙げられる。火打石入手の観点からは、中小路遺跡（宮崎）例のような、ピンポン玉大に復元されるよく転磨された球体状のチャート・石英礫を打ち割った火打石が散見される点に注目したい。こういったチャート・石英の転磨礫は、日向各地を流下する河川敷やその一帯の段丘礫層が露出したような箇所から採取されたものと推定され、組織的というよりも自家消費的な火打石石材の採取であったと考えられる。中世においても、古代の場合と同じく、特定産地の火打石が広域に流通するようなものでない、いわゆる地産地消による火打石の消費形態が継続したと解される。

近世以降における年代的定点となる火打石は多くあり（図4・5）、延岡城内遺跡・岡遺跡・野首第1遺跡・宮ノ東遺跡・次郎左右衛門遺跡・津和田第2遺跡・佐土原城跡・高岡麓遺跡・上の原第1遺跡・中満遺跡・南御屋鋪跡・八幡遺跡・飫肥城下町遺跡の遺構出土品等が挙げられる。日向における古代から近世の火打石石材には、チャート・大田井産チャート・石英・硬砂岩（石英に近い石質）・鉄石英・メノウ・玉髓・珪質岩があつたが、近世以降においては、大田井産チャート・玉髓の利用が特徴的である。

まず、大田井産チャート製火打石については、現在の徳島県阿南市大田井で産出したもので、船築紀子氏によると、その市場評価の高まりと販売量の増加を受け、18世紀後半以降には、阿波藩の藩政改革の一環としてその採掘・流通・販売に藩の管理が強化され、阿波藩の管理下で大坂の商人（沢屋徳兵衛）が火打石流通の委託販売を担っており、さらに、19世紀の初頭には、大田井産チャート製火打石は、京都・大阪のほか近国、西国に出荷され、高値で取引されており、品質のうえでも高評価を得ていたという（船築2010ほか）。日向における大田井産チャート製火打石の出土は、東臼杵の延岡城内遺跡（県埋セ調査地点）・野地久保畠遺跡・海舞寺遺跡・延岡市吉野ならびに北浦町鳴川引地、日向入郷の塩見城跡・板平遺跡第1次調査・同第3次調査・山下遺跡・岡遺跡第6次調査・同第7次調査、児湯では野首第1遺跡・新富町内・宮ノ東遺跡・宮崎の中別府遺跡・学頭遺跡、西諸県の中満遺跡、北諸県の八幡遺跡で確認された。このうち、出土遺構等の年代が絞られるものには、野首第1遺跡14号土坑（18世紀後半から19世紀）、同遺跡61号土坑（同前）、中満遺跡5号土坑（同前）、八幡遺跡8号土坑（同前）、飫肥城下町遺跡125号廃棄土坑（19世紀前半）がある。九州のほぼ一円でも出土を確認できる点も勘案すれば、日向においては遅くとも18世紀後半以降には大田井産チャート製火打石の利用が開始され、日向の全域で流通した状況を想定可能である。

次に出土が目に付く玉髓については、見た目上は江戸遺跡で出土する水戸産火打石にもよく似た乳白色あるいは白色半透明をした良質緻密な石材であり、その産地特定には至っていないながら、出土遺跡の分布や地質環境からみた産地候補の1つに薩摩藩域がある。日向における玉髓製火打石の出土は、児湯の内野々第4遺跡・銀座第1遺跡・前ノ田村上第1遺跡・湯牟田遺跡第1次調査・唐木戸第2遺跡・青木遺跡・野首第1遺跡・野首第2遺跡・北牛牧第5遺跡・牧内第1遺跡・上日置遺跡・宮ノ東遺跡・別府原遺跡、宮崎の清武城跡・津和田第2遺跡・佐土原城跡第6次調査・同第8次調査・高岡麓遺跡22地点・上の原第1遺跡・囲遺跡・須田木遺跡・竹ノ内遺跡・枯木ヶ迫遺跡・曾井第2遺跡・陣ノ元遺跡、西諸県の梅木原遺跡・広庭遺跡、北諸県の南御屋鋪跡・筆無遺跡・働く木遺跡、南那珂の飫肥城下町遺跡・宮鶴第2遺跡で確認された。このうち、出土遺構等の年代が明確なものには、佐土原城跡第6次調査54号土坑（18世紀中頃）、南御屋鋪跡1号階段状遺構（18世紀後半）、佐土原城跡第8次調査38号土坑（18世紀後半～19世紀）、津和田第2遺跡7号土坑墓（19世紀代）があり、高岡麓遺跡22地点の撹乱（近世以降）、上の原第1遺跡の2号溝（近世）ならび4号溝（近世末以降）、飫肥城下町遺跡40号遺構（近世後半以降）出土品も参考とすれば、遅くとも18世紀中頃以降には、児湯・宮崎・西諸県・北諸県・南那珂において玉髓製火打石の利用が開始されたとわかる。大田井産チャート製火打石と近い年代から流通する一方で、日向における流通範囲は大田井産チャートのそれと比べて狭いという資料現状である。日向以外での玉髓製火打石の出土例には、鹿児島県内で散見されるほか（鹿児島大学構内遺跡・弥勒院遺跡等）、大分市所在の府内城・府内城下町遺跡や福岡県上毛町内の遺跡でも出土が知られる（藤木2020）。大田井産チャート製火打石との出土遺跡分布の異同は、当時の社会・経済状況

等を反映している可能性が予想され、今後も注視したい。なお、本稿で珪質岩とした石材や八幡遺跡出土メノウについて、熊本県桑ノ木津留周辺や薩摩藩域に産地を想定できそうであり、玉髓とともに産地特定が急務である。

石材利用の観点からは、18世紀代における大田井産チャート・玉髓という広域流通品の登場によって、古代から中世でみられた地産地消的な石材利用が失われるというものではなく、粗質チャートや石英等といった地元産石材が広域流通品とともに火打石に用いられたと整理された。この変化は、中世までの地産地消的な火打石から、18世紀以降になって大田井産チャート製火打石等の広域流通品が地元産石材の火打石とともに用いられるという九州各地の事例等（藤木 2020 ほか）と一致している。

4 おわりに

本稿では、日向における遺跡出土火打石を俯瞰し、おおよその変遷観やその背景等へ言及することができた。本稿が契機となって、新たな資料増加や他地域との比較検討が進むことに期待したい。

謝辞

本稿を進めるにあたって、遺跡の評価や遺物の年代観、資料見学にかかる準備や手続き、未掲載資料を収めた膨大なコンテナの出し入れやその検索等において、宮崎県埋蔵文化財センター・宮崎県立西都原考古博物館の関係者のほか、次に挙げる宮崎県内の埋蔵文化財関係者の皆さん、機関にたいへんお世話になった。文末ではあるが、御名前（個人、機関の順で五十音順、敬称略）を挙げることで感謝の意を表したい。

秋成雅博 石村友規 伊東 但 井上誠二 今城正広 小野信彦 甲斐康大 尾方農一 緒方俊輔
河野裕次 金丸武司 加賛淳一 栗山葉子 栗畠光博 桑村壯雄 稲田脩介 島田正浩 高浦 哲
太川裕晴 竹中克繁 近沢恒典 津曲大祐 中野和浩 西嶋剛広 樋渡将太郎 増谷理絵 山田 聰
山本 格 えびの市教育委員会 西都市教育委員会 新富町教育委員会 小林市教育委員会
延岡市教育委員会 宮崎市教育委員会 都城市教育委員会

註

- (1) 本稿では、現在の宮崎県域に相当する範囲を日向としている。また、日向の火打石出土点数は、2021年末時点での九州8県別火打石出土点数として第1位であり、考古資料としての火打石への認識が埋蔵文化財関係者の間で広まりかつ深まることによる大きな成果と言える。
- (2) 本文中で頻出する用語の煩雑さを解消するため、宮崎県教育委員会：県教委、各市町村教育委員会：各市町村教委、宮崎県埋蔵文化財センター：県埋セ、藤木 2022: 文①と略して記載する。個々の遺跡位置は図2に示した。
- (3) ここに挙げた事例以外に、延岡城跡・延岡城内遺跡の他の調査次においても、大田井産チャート・チャート製火打石が複数出土していることを、延岡市教育委員会のご協力により確認できている。
- (4) 日向入郷では、椎葉村不土野（図2-A）で収集された民具の中に火打石をはじめ発火具一式があり（泉1980）、火打石の石材は粗質の石英製である（藤木2004）。収集時の聞き取りでは、白い石をコメイシ、赤褐色の石をカドイシと呼んでいたという（泉1980）。前者は石英やチャート、後者はチャートか鉄石英等と推測される。
- (5) 児湯では、西米良村（図2-B・C）や西都市東米良（図2-D）で収集された民具の中に火打石をはじ

め発火具一式がある（藤木 2017）。火打石はいずれも良質のチャートで、西米良村資料に付された台帳には、火打石を熊本県球磨郡から購入したと記載されている。

- (6) 銀座第1遺跡第3次調査（県埋セ 2006a）では、1号溝状遺構から石英製火打石・2号溝状遺構からチャート製火打石・3号溝状遺構からチャート製火打石の欠片があると報告書に記載されているが、実見により火打石ではないと確認した。
- (7) 玉髓製火打石は7点あり、うち2点は発掘調査報告書で石核とされていたものを藤木 2004 で火打石として評価したものである。残る5点と火打石の欠片1点は、文①で報告している。
- (8) 報告では7世紀前半の土坑2出土と記載されているが、正しくは包含層出土である（報告担当の加藤徹のご教示）。
- (9) 一見、大田井産チャートにも類するが、典型例ではなく、大田井産か他産地のものなのか区別する決定打がない。
- (10) 天神免遺跡出土の桑ノ木津留系黒曜石製火打石（えびの市教委 2010 の第 46 図 338）、岡松遺跡出土の珪化凝灰岩・珪質凝灰岩製火打石（えびの市教委 2010 の第 53 図 433,444、第 65 図 707）と報告された計3点は、実見の結果、使用痕等が観察されないことから火打石ではなく、また、未使用的火打石と解釈するのも難しいと判断した。
- (11) 火打石の出土位置等は、調査担当の谷口武範のご教示による。
- (12) 筆無遺跡の日東系黒曜石製火打石（県埋セ 2006a の第 85 図 742）は、火打石として用いられた際に稜線上に付くような細かな剥離が看取されるものの、火打石である可能性は低いと判断した。

【 主な参考・引用文献 】

- 泉 房子 1980 「火打ち金」『民具再見』鉱脈社、310-311頁
- 上床 真 2015 「南部九州出土の東播系須恵器」『中近世土器の基礎研究』26、115-130頁、日本中世土器研究会
- 黒川忠広 2014 「石器石材としての大川原産珪質岩」『縄文の森から』第7号、1-7頁、鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 鈴木重治 1967 「宮崎県出羽洞穴の発掘調査」『考古学ジャーナル』4、12-16頁、ニュー・サイエンス社
- 藤木 聰 2004 「九州における火打石・火打金 - 資料集成と基礎的な整理 -」『古文化談叢』第51集、187-200頁、九州古文化研究会
- 藤木 聰 2012 「近世における阿波大田井産チャート製火打石の流通」『西海考古』第8号、183-190頁、故福田一志氏追悼論文集刊行事務局
- 藤木 聰 2014 「西都原考古博物館所蔵の火打石・火打金について」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第10号、58-61頁、宮崎県立西都原考古博物館
- 藤木 聰 2017 「古代から近世の日向における火打金とその変遷～鳥居龍藏の言及と考古・民俗資料の集成～」『宮崎考古』第27号、17-26頁、宮崎考古学会
- 藤木 聰 2020 「九州の火打石 - 研究の到達点と展望 -」『江戸遺跡研究』第7号（特集 火打石研究の最前線）、11-26頁、江戸遺跡研究会
- 藤木 聰 2022 「古代・中世・近世の日向における火打石～基礎資料の報告（1）～」『研究紀要』第7集、25-40頁、宮崎県埋蔵文化財センター（※本稿の文①）
- 堀田孝博 2012 「宮崎平野部における平安時代の土器について - 土師器供膳具を中心に -」『宮崎考古』第23号、55-78頁、宮崎考古学会

- 堀田孝博 2016 「宮崎平野部の中世土師器」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究Ⅱ』、35-44 頁、
宮崎考古学会
- 堀田孝博 2022 「日向における近世土師器の出土事例」『研究紀要』第 7 集、15-24 頁、宮崎県埋蔵文化
財センター
- 宮田栄二 2023 「鹿児島の石器石材をさがしもとめて - 地下資源鉱床付近の探索と石材の確認 -」『九州旧石器』
第 27 号、橘昌信先生追悼論文集、235-244 頁、九州旧石器文化研究会
(発掘調査報告書)
- えびの市教育委員会 1996 『小木原遺跡群：蕨地区（C・D 地区）・久見迫 B 地区・地主原地区；原田・上
江遺跡群：六部市遺跡・蔵元遺跡・中満遺跡・法光寺遺跡 1・2』えびの市埋蔵文化財調査報告書第 16
集 /1997 『田代地区遺跡群：上田代遺跡・松山遺跡・竹之内遺跡・妙見原遺跡』第 20 集 /2002 『長江
浦地区遺跡群：内丸遺跡・弁財天遺跡・馬場田遺跡・水流遺跡・役所田遺跡・小路下遺跡・浜川原遺跡』
第 32 集 /2003 『小岡丸地区遺跡群：北田遺跡・田之上城跡』第 37 集 /2010 『北岡松地区遺跡群：天
神免遺跡 岡松遺跡』第 48 集 /2011 『下鷺遺跡』第 52 集
- 清武町教育委員会 1990 『清武町遺跡詳細分布調査報告書』第 4 集 /2004 『須田木遺跡』第 12 集
- 小林市教育委員会 2000 『梅木原遺跡発掘調査報告書』小林市文化財調査報告書第 11 集 /2001 『市谷遺
跡群 餅田遺跡・大部遺跡・杉薙遺跡・年神遺跡』第 13 集 /2003 『広庭遺跡』第 16 集
- 西都市教育委員会 2009 『日向国分寺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第 56 集
- 新富町教育委員会 2007 『新富町の埋蔵文化財（改訂版）』新富町文化財調査報告書第 46 集
- 高千穂町教育委員会 1978 『薄糸平遺跡』国鉄高千穂線建設埋蔵文化財発掘調査報告書
- 延岡市教育委員会 2017 『市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（平成 28 年度）』延岡
市文化財調査報告書第 56 集 /2019 『延岡城内遺跡VI（延岡城西ノ丸跡）』第 61 集
- 日向市教育委員会 2020 『山下遺跡』
- 都城市教育委員会 2002 『横市地区遺跡群』都城市文化財調査報告書第 58 集 /2008a 『早馬遺跡』第 84
集 /2008b 『加治屋 B 遺跡（平安時代～近世編）』第 86 集 /2014 『真米田遺跡 七日市前遺跡』第 111 集
/2015 『祝吉第 3 遺跡（第 2 次調査）』第 116 集 /2017 『南御屋舗跡』第 127 集 /2018 『松原地区遺跡（第
7 次調査）』第 133 集 /2019 『安永城跡二之丸』第 138 集
- 宮崎県教育委員会 1979 『九州縦貫自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』/1991 『国衙・郡衙・古寺
跡等遺跡詳細分布調査概要報告書Ⅲ』/1993 『吾平原第 2 遺跡・宮ノ前第 2 遺跡・城ノ平遺跡』/1994 『三
納代地区遺跡群 城ノ下遺跡 柳原遺跡 志戸平遺跡（二次）』/1995a 『学頭遺跡・八児遺跡』/1995b 『打
扇遺跡・早日渡遺跡・矢野原遺跡・藏田遺跡』/1996 『高岡麓遺跡』
- 宮崎県教育委員会 2007 『西都原 173 号墳・西都原 4 号地下式横穴墓・西都原 111 号墳』特別史跡西都
原古墳群発掘調査報告書第 6 集 /2019a 『西都原 201 号墳・第 1 支群の小円墳群（西都原 5・6・10・
11・12 号墳）・西都原 16 号墳』第 12 集 /2019b 『西都原 265 号墳』第 14 集 /2024 『第 1 支群横穴
墓群 西都原 115 号墳 西都原 291 号墳 第 3 支群の滅失古墳』第 16 集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1999 『西下本庄遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 15 集
/2000a 『上の原第 2 遺跡・上の原第 1 遺跡・上の原第 4 遺跡・白ヶ野第 3 遺跡 A 地区』（第 1 分
冊）、第 25 集 /2000b 『竹ノ内遺跡』第 27 集 /2001 『内宮田遺跡・柳迫遺跡・中別府遺跡』第 30 集
/2002a 『枯木ヶ迫遺跡』第 55 集 /2002b 『別府原遺跡 西ヶ迫遺跡 別府原第 2 遺跡』第 61 集 /2003a
『八幡遺跡』第 70 集 /2003b 『祇園原遺跡・春日地区遺跡第 2 地点』第 73 集 /2003c 『北牛牧第 5
遺跡・銀座第 3A 遺跡』第 80 集 /2004 『中山遺跡』第 93 集 /2005a 『唐木戸第 2 遺跡』第 100 集

/2005b『湯牟田遺跡（一次調査）』第107集/2005c『永牟田第1遺跡』第114集/2005d『前ノ田村上第1遺跡』第116集/2006a『銀座第1遺跡（一・二・三・四次調査）』第120集/2006b『天神本第2遺跡 大内原遺跡』第123集/2006c『今井野第2遺跡 天下城山遺跡』第135集/2006d『別府町遺跡』第137集/2007a『中ノ迫第1遺跡（一次・二次）』第143集/2007b『山田遺跡』第146集/2007c『八幡第2遺跡』第148集/2007d『赤坂遺跡』第151集/2007e『湯牟田遺跡（二次調査）』第152集/2007f『吉野第2遺跡』第155集/2007g『野首第1遺跡II』第157集/2007h『牧内第1遺跡（一次～三次調査）』第163集/2007i「団遺跡（仮称）出土の遺物について」『宮崎県埋蔵文化財センター年報』第11号、24-33頁/2008a『筆無遺跡』第166集/2008b『尾立第2遺跡』第169集/2008c『野首第2遺跡 第三分冊：縄文時代後期・晚期、弥生時代、古墳時代、古代以降編』第172集/2008d『宮ノ東遺跡』第173集/2008e『曾井第2遺跡（第一次・第二次調査）』第175集/2008f『板平遺跡』第176集/2008g『大島畠田遺跡』第178集/2009a『住吉B遺跡・赤石遺跡』第184集/2009b『高鍋城三ノ丸跡』第186集/2010a『宮鶴第2遺跡』第187集/2010b『海舞寺遺跡 市之串遺跡 中野内遺跡 森ノ上遺跡（弥生・古墳時代編）カラ石の元遺跡』第189集/2010c『次郎左衛門遺跡』第192集/2011a『銀座第1遺跡（五次調査）』第194集/2011b『尾花A遺跡II 弥生時代以降編』第195集/2011c『野地久保畠遺跡 森ノ上遺跡』第196集/2011d『家田古墳群・家田城跡』第198集/2011e『板平遺跡（第3・4次調査）』第199集/2011f『内野々遺跡 内野々第2・第3遺跡 内野々第4遺跡』第202集/2011g『働く木遺跡』第205集/2011h『東光寺遺跡』第207集/2011i『富吉前田遺跡』第209集/2012a『塩見城跡』第210集/2012b『岡遺跡（第6・7次調査）坂元第2遺跡』第212集/2012c『延岡城内遺跡』第217集/2012d『飫肥城下町遺跡』第220集/2012e『坂ノ口遺跡』第221集/2013a『岡遺跡（第9・13・15次調査）』第223集/2013b『宮ヶ迫遺跡』第228集/2014『置県130年記念 埋蔵文化財資料活用促進事業報告書』第232集/2016『笹ヶ崎遺跡（第一次～第三次調査）』第240集/2017『潮遺跡・山之後遺跡』第242集/2018『橘通東一丁目遺跡』第244集/2019a『平底第2遺跡』第246集/2019b『青木遺跡』第248集/2021『保木島遺跡』第258集/2024a『樋口遺跡』第267集/2024b『陣ノ元遺跡』第269集

宮崎市教育委員会 2010『下北方塚原第1遺跡』宮崎市文化財調査報告書第78集/2011『下北方塚原第2遺跡』第82集/2012『高岡麓遺跡第28・31・32地点』第90集/2013『史跡 穂佐城跡I』第94集/2014『宮ヶ迫遺跡』第100集/2015『佐土原城跡（第8次調査）』第107集/2016『佐土原城跡第6次調査』第109集/2019『中小路遺跡』第127集/2020a『団遺跡』第130集/2020b『宮崎城跡』第132集/2021a『津和田第2遺跡・竹ヶ島第2遺跡』第134集/2021b『中ノ原第2遺跡』第138集

図出典

図1: 藤木2022 / 図2: 藤木2022を改変 / 図6・7: 実測・製図は藤木、火打石等は全て本稿初出

図3: 写真は藤木撮影（1列目：左から、藤木2014の第1図3、本稿図6-1、同図6-6、同図6-4、同図6-3、同図6-5、同図6-2、県埋セ2010bの第4図5。2列目：左から、県埋セ2010bの第4図4、県埋セ2011cの第75図548、同第15図139、県埋セ2010bの第75図48、県埋セ2011dの第17図32、県埋セ2007bの第167図839、同図840、同図841、同図842。3列目：左から、藤木2014の第1図4、県埋セ2007fの第130図535、県埋セ2006cの第18図63、延岡市教委2017のFig.61-12、県埋セ2008fの第75図405、同図404、同図406、県埋セ2011eの第25図66。4列目：左から、県埋セ2006aの第82図268、県埋セ2006aの第118図417、同図416、本稿図6-8、同図6-9、同図6-10、同図6-11、同図6-12、同図6-13。5列目：左から、県埋セ2008dの第245図4746、

同図 4747、同図 4748、同図 4749、同図 4750、同図 4751、同図 4753、同図 4755、同図 4756。6列目：左から、県埋セ 2008d の第 245 図 4758、同図 4759、同図 4761、同図 4763、同図 4764、宮崎市教委 2016 の第 84 図 534、同図 537、本稿図 6-17、同図 18。7列目：左から、本稿図 6-19、同図 6-20、同図 6-21、宮崎市教委 2013 の第 41 図 279、同図 280、宮崎市教委 2013 の第 71 図 279、宮崎市教委 2020a の第 20 図 119、同第 36 図 291、同図 292。8列目：左から、県埋セ 2013b 第 62 図 228、宮崎市教委 2021b の第 58 図 206、宮崎市教委 2012 の第 10 図 52、宮崎市教委 2014 の第 157 図 801、宮崎市教委 2020b の第 34 図 199、宮崎市教委 2008e の第 108 図 547、本稿図 7-28、同図 26、えびの市教委 2011 の第 14 図 141。9列目：左から、えびの市教委 2010 の第 44 図 288、同 113 図 996、同 457 図 4593、同第 54 図 430、県埋セ 2008g の第 108 図 1707、本稿図 6-23、県埋セ 2011g の第 67 図 424、県埋セ 2008a の第 85 図 743、同図 744。10列目：左から、県埋セ 2021 の第 23 図 67、都城市教委 2008a の第 24 図 81、都城市教委 2014 の第 208 図 2877、都城市教委 2018 の第 18 図 144、都城市教委 2019 の第 12 図 11、都城市教委 2008b の図 117-1576、県埋セ 2010a の第 25 図 103、県埋セ 2012e の第 15 図 91、本稿図 7-29。

図 4・5: 藤木作成（東臼杵：上左から順に、県埋セ 2010b の第 11 図 48、延岡市教委 2019 の Fig.57-19、県埋セ 2012c の第 9 図 26、同第 21 図 145、同第 24 図 194、同第 24 図 195。日向入郷：上左から順に、県埋セ 2012a の第 169 図 1211～12245、県埋セ 2013a の第 34 図 171～178。児湯：上左から順に、県埋セ 2008d の第 186 図 3488～3490、県埋セ 2006d の第 37 図 51～53、県埋セ 2010c の図 33-13、県埋セ 2009b の第 19 図 43、県埋セ 2008d の第 259 図 5186、県埋セ 2010c の図 18-204、県埋セ 2008d の第 260 図 5201、同第 261 図 5228、同第 260 図 5205、県埋セ 2007g の第 91 図 817～836。宮崎：上左から順に、藤木 2022 の図 5-51、宮崎市教委 2020a の第 18 図 91、宮崎市教委 2019 の第 5 図 4、本稿図 6-23、本稿図 6-16、本稿図 6-14、本稿図 6-15、宮崎市教委 2016 の第 84 図 532、宮崎市教委 2015 の第 15 図 106、宮崎市教委 2021a の第 14 図 45、藤木 2022 の図 3-8、藤木 2022 の図 3-11。西諸県：上左から順に、えびの市教委 2010 の第 455 図 4554、本稿図 7-27、本稿図 7-25。北諸県：上左から順に、都城市教委 2014 の第 41 図 206、都城市教委 2008a の第 18 図 48、都城市教委 2015 の第 17 図 48、本稿図 6-24、都城市教委 2017 の第 15 図 52、藤木 2022 の図 3-16。南那珂：上左から順に、藤木 2022 の図 4-36、藤木 2022 の図 4-39、同図 4-37。

追記

脱稿後、以下の報告例に接した。資料実見できていないため、その位置づけ等は今後の課題としたい。

- ・下北方下郷第 8 遺跡：1号溝状遺構（9世紀後半～10世紀前葉）出土玉髓製火打石（第 12 図 63）
- ・本永寺原遺跡：A 区出土チャート製火打石（第 47 図 186）

（発掘調査報告書）

宮崎市教育委員会 2022a 『下北方下郷第 7 遺跡 下北方下郷第 8 遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 140 集
宮崎市教育委員会 2022b 『本永寺原遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 141 集

付. 火打石の基礎資料報告（2）

本付編は、前報告（藤木 2022）に続くもので、①発掘調査報告書へ未掲載の資料中から新たに把握されたもの、②清武町教育委員会による分布調査により採集されたもの、③先史時代の石器として報告されていた中から火打石であると認識を改めるべきものを報告する。

①については、樋口遺跡（図 2-1、県埋セ 2024a）・平底第 2 遺跡（図 2-4、県埋セ 2019）・出羽洞穴（図 2-3、鈴木 1967 ほか）・矢野原遺跡（図 2-6、県教委 1995b）・銀座第 1 遺跡（図 2-28、県埋セ 2006a）・西都原 201 号墳（図 2-53、県教委 2019a）・西都原 265 号墳（図 2-53、県教委 2019b）・佐土原城跡第 6 次調査（図 2-57、宮崎市教委 2016）・橋通東一丁目遺跡（図 2-68、県埋セ 2018）・笛ヶ崎遺跡（図 2-102、県埋セ 2016）・蔵元遺跡（図 2-88、えびの市教委 1996）・中満遺跡（図 2-89、えびの市教委 1996）・別府ノ木遺跡（図 2-107、県埋セ 2014）の 13 遺跡 29 点である。

樋口遺跡では、報告書掲載の火打石以外に、試掘トレンチ 1（本発掘調査対象地外）から 1 点出土した（図 6-1）。火打石は濃緑色のチャート製で、石核状で稜線が顕著に潰れており、潰れとともに鉄鑄の付着も顕著である。法量 $2.5 \times 2.5 \times 2.0$ cm・重量 12.3g。平底第 2 遺跡では、試掘トレンチ 5（本発掘調査対象地外）から 1 点出土した（図 6-2）。火打石は白色で光沢を持つチャート製で、法量 $2.4 \times 1.5 \times 1.6$ cm・重量 4.5g である。石核状。ほぼ全ての稜線が顕著に潰れ、鉄鑄の付着も見られる。出羽洞穴の火打石は、鈴木重治による発掘品である旧南九州大学所蔵（現在は宮崎県埋蔵文化財センターで保管）のもので、「AT」と注記された火打石 4 点が確認された（図 6-3～6）。いずれもやや透光性のある灰白色のチャート製であり、3・5 は石質もよくことやその形状から一見すると先史時代の剥片石器のようであるが、その稜線上に弱いながら潰れがあることから火打石として評価した。3 は法量 $1.7 \times 1.3 \times 1.4$ cm・重量 2.5g であり、潰れは弱い。4 は法量 $4.5 \times 1.5 \times 1.2$ cm・重量 3.4g であり、サイコロ状に使い込まれており、潰れには鉄鑄付着がある。礫面が一部に見られ、橙色をした転磨面である。5 は法量 $1.8 \times 1.4 \times 0.5$ cm・重量 1.4g、6 は法量 $3.0 \times 2.5 \times 1.3$ cm・重量 9.8g である。矢野原遺跡では、搅乱から 1 点出土した（図 6-7）。火打石はあまり良質でない灰白色チャート製で、周縁や正面・裏面の突出部に潰れがある。法量 $3.1 \times 2.6 \times 1.8$ cm・重量 13.5g。銀座第 1 遺跡第 3 次調査では、中世以降の 1 号溝状遺構からオレンジがかかった半透明乳白色の玉髓製火打石の欠片 1 点（図 6-9）、表土出土の灰白色チャート製火打石 1 点（図 6-8）・玉髓製火打石の欠片 1 点（図 6-10）を新たに図化した。8 は周縁に潰れがあり、法量 $2.0 \times 1.4 \times 0.6$ cm・重量 1.3g。9 は報告書本文中でその存在が報じられていたもので、上縁にわずかに潰れがある。法量 $0.8 \times 1.0 \times 0.2$ cm・重量 0.1g。10 は正面の稜上に潰れがある。法量 $1.0 \times 0.7 \times 0.4$ cm・重量 0.2g。西都原古墳群の古墳調査の中でもいくつか火打石が出土している。西都原 201 号墳では、墳丘南西側のトレンチ 12B の表土から 1 点（図 6-11）、同南側のトレンチ 12A の周溝検出面から 1 点（図 6-12）が出土した。11 は石英製で、細身の楕円礫を打ち割って生じた礫面と剥離面境の稜線や、石質の粗さにより生じた剥離面中の凹凸の凸部に、火打石として使用した際の潰れが残る。また、左面には礫面が打ち欠けた箇所があり、同箇所にも潰れが残る。法量 $4.8 \times 2.5 \times 1.9$ cm・重量 21.8g。12 は、乳白色のチャート製で、直径 3cm 大の小円礫を打ち割って生じた礫面と剥離面境の稜線に、火打石として使用した際の潰れが残る。法量 $2.1 \times 1.5 \times 1.9$ cm・重量 5.7g。西都原 265 号墳では、トレンチ 3 の表土から 1 点出土した（図 6-13）。火打石は石英製で、剥片が利用され、稜線に部分的に火打石として使用した際の潰れが残る。法量

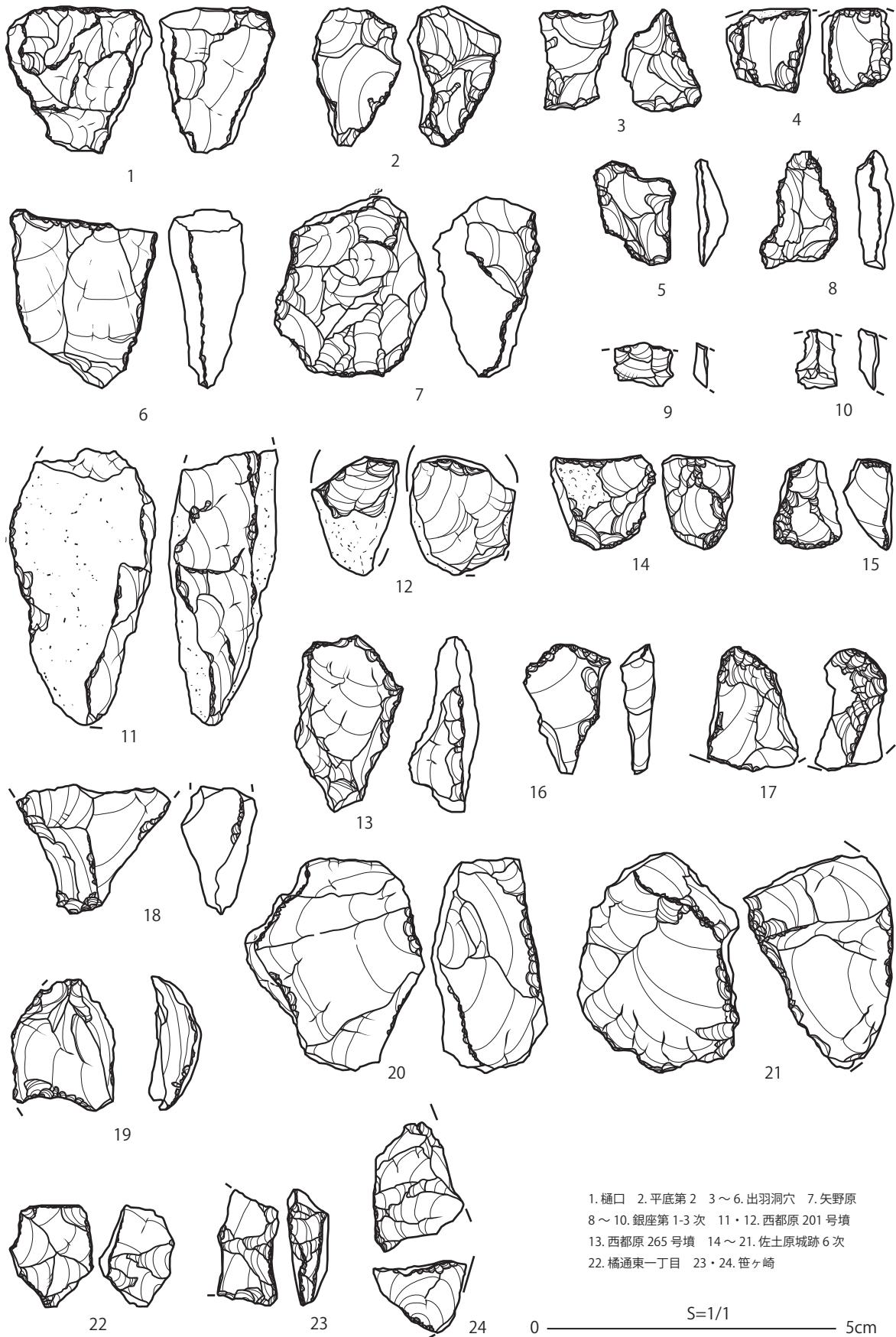


図6 火打石の新資料実測図 (1)

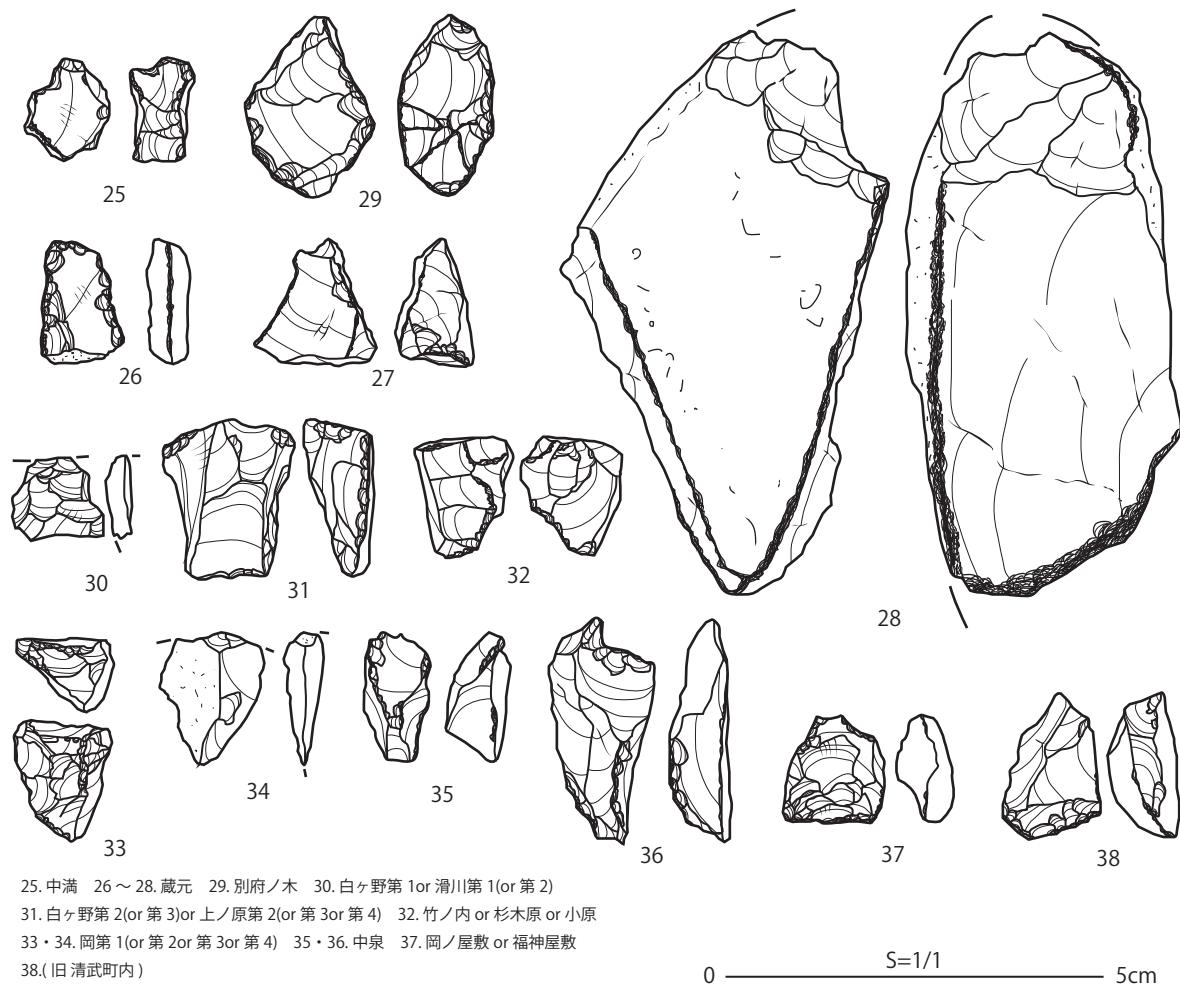


図7 火打石の新資料実測図 (2)

3.0 × 1.9 × 1.2cm・重量 4.7g。佐土原城跡第6次調査では、発掘調査報告書に3点の火打石が掲載されており、今回、未掲載資料の中から新たに火打石7点の出土を新たに確認・図化した（図6-14～21）。17～19世紀までの遺物を含む6号溝状遺構埋土出土の珪質岩製火打石1点（図6-14）は、法量1.7 × 1.8 × 1.3cm・重量4.1gである。同じ珪質岩製の火打石が高岡麓遺跡5地点（県教委1996・藤木2022）で出土している。6号溝状遺構埋土からは火打石の欠片を利用した玉髓製火打石1点（図6-15）も出土しており、法量1.5 × 1.2 × 0.9cm・重量1.5gである。佐土原城跡第6次調査の54号土坑出土品（図6-16）は玉髓製で、法量2.2 × 1.5 × 0.6cm・重量1.4gであり、15と同じく火打石の欠片を利用した火打石である。54号土坑は、出土陶磁器・土師器の検討により18世紀中頃とされ（堀田2022）、火打石もその年代とみてよからう。このほか、近世以降に収まるであろう1939号柱穴から灰白色をベースに黒色の多いチャート製火打石（図6-17）、980号柱穴から灰黒色チャート製火打石（図6-18）のほか、試掘トレンチ出土や調査区内一括資料（図6-19～21）がある。17は円礫分割片の稜線が顕著に潰れるものである。18は弱い潰れが部分的にみられる。19は灰白色チャート製火打石で、円礫を分割した剥片素材である。20は石英製火打石である。弱い潰れが稜線上に入るもので、全体に手擦れ感がある。21は17と同じ石味のチャート製火打石である。円礫を分割したもので、稜線上の潰れが顕著である。法量は、17が2.1 × 1.6 × 1.3cm・重量4.0g、18が2.2 × 2.7 × 1.3cm・重量5.3g、19が2.3 × 1.8 × 0.9cm・重量3.5g、20が3.7 × 3.1 × 2.0cm・重量25.2g、21が3.8 × 2.8 × 2.6cm・重量25.5g。

橋通東一丁目遺跡では、E5 グリッドV層から1点出土した（図6-22）。V層は、弥生時代から中世までの遺物が多量に含まれる一方で、近世以降の遺物を含まないことから、中世に洪水等により形成された遺物包含層とされ、火打石もまた中世以前のものであろう。火打石はチャート製で、正面左・同右の稜線が弱く潰れる。法量 $1.7 \times 1.4 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 2.7g。笹ヶ崎遺跡では、火打石2点がある（図6-23・24）。23は第1次調査のB区から出土した灰白色チャート製火打石であり、左面は欠損する。上・右・下面の稜線が顕著に潰れ、鉄鏽の付着がある。法量 $2.0 \times 1.1 \times 0.7\text{cm}$ ・重量 1.7g。24はB区の14～15世紀前半の3号溝状遺構出土の火打石であり、緋色と暗紫色の縞が走る鉄石英製となる。転磨礫を素材とするもので、左側縁の潰れが顕著である。法量 $2.3 \times 1.6 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 4.5g。中満遺跡では、18世紀末～19世紀代とされる5号土坑から大田井産チャート製火打石1点が出土した（図7-25）。法量 $1.4 \times 1.1 \times 0.9\text{cm}$ ・重量 1.2g。蔵元遺跡では、火打石3点が出土した（図7-26～28）。A区出土品（図7-28）は石英製で、礫面を大きく残しており、礫面・剥離面の境の稜線上に顕著な潰れがある。法量 $7.4 \times 4.4 \times 3.7\text{cm}$ ・重量 114.2g。B区出土品（図7-26）は灰色チャート製火打石で、剥片素材である。法量 $1.7 \times 1.1 \times 0.6\text{cm}$ ・重量 1.1g。15世紀後半とされる6号土坑出土品（図7-27）は灰白色で粗質のチャート製火打石で、潰れは弱い。法量 $1.7 \times 1.6 \times 1.0\text{cm}$ ・重量 2.2g。26・28はいずれも遺跡の全体相から中世の火打石と考えられる。別府ノ木遺跡では、近世以降の陶磁器を多く含むI層から火打石1点が出土した（図7-29）。火打石は薄い緑灰色に赤褐色の縞入るチャート製で、一見すると細石刃核のようにも見える。稜線が丸みを帯びるほどよく使い込まれている。法量 $2.4 \times 1.7 \times 1.3\text{cm}$ ・重量 4.4g。

②については、採集遺跡の特定が十分でないものもあるが、旧清武町内で採集された点は確実な資料である。資料は9点あり、全て玉髓製である（図7-30～38）。30は白ヶ野第1遺跡・滑川第1（あるいは第2）遺跡採集の火打石の欠片で、使用痕はない。法量 $2.8 \times 1.3 \times 0.4\text{cm}$ ・重量 0.4g。31は白ヶ野第2（あるいは第3）遺跡か上ノ原第2（あるいは第3・第4）遺跡採集の火打石で、一部が欠損している。周縁に部分的ながら明瞭な潰れがある。法量 $1.8 \times 1.8 \times 0.9\text{cm}$ ・重量 3.2g。32は竹ノ内遺跡・杉木原遺跡・小原遺跡のいずれかで採集された火打石であり、石核状で稜に部分的ながら明瞭な潰れがある。法量 $1.9 \times 1.3 \times 1.4\text{cm}$ ・重量 2.7g。33・34は岡第1（あるいは第2・第3・第4）遺跡採集資料である。33は石核状に使い込まれた火打石である。法量 $1.1 \times 1.3 \times 1.0\text{cm}$ ・重量 1.6g。34は火打石の欠片である。法量 $1.6 \times 1.3 \times 0.5\text{cm}$ ・重量 0.9g。35・36は中泉遺跡採集資料である。35は火打石の欠片である。潰れ等を伴わない鏽の付着が認められ、耕作等で農具によって付いた傷が鏽となった可能性が高い。法量 $2.1 \times 0.8 \times 0.9\text{cm}$ ・重量 1.2g。36は火打石で、石核状で稜に部分的に潰れがある。法量 $1.7 \times 1.5 \times 0.8\text{cm}$ ・重量 2.6g。37は岡ノ屋敷遺跡あるいは福神屋敷遺跡採集の火打石で、一部欠損するものの、全ての稜が明瞭に潰れる。法量 $3.0 \times 1.3 \times 0.8\text{cm}$ ・重量 1.3g。38は採集遺跡の特定ができなかった火打石であり、石核状で稜に部分的に潰れがある。法量 $1.4 \times 1.3 \times 0.9\text{cm}$ ・重量 2.1g。

③については、2遺跡2件が新たに見出された。竹ノ内遺跡では、細石刃核とされた資料（県埋セ2000bの第10図1）について、稜線に潰れがよく残された火打石であると確認された。「SC11-38」と注記され（報告書の観察表は誤記とみられる）、近世とされる同遺跡の11号土坑出土の可能性がある。広庭遺跡（小林市教委2003・文①）では、これまでに火打石2点が報告されていたが、今回、報告書掲載の4区出土剥片（小林市教委2003の第25図77）について玉髓製火打石であると確認された。4区では溝状遺構や柱穴群とともに一定量の18世紀中頃～19世紀の陶磁器等が出土しており、火打石もこれに伴うとみてよからう。